

(続紙1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	上原 健太郎
論文題目	現代マレー世界におけるイスラーム型マイクロクレジットと実体経済 —動産担保貸付 (アッ=ラフヌ) の役割と動態—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、近年、イスラーム世界で取り組みが急拡大しているイスラームの理念にもとづいたマイクロクレジット (イスラーム型マイクロクレジット) の実践に着目したものである。とりわけ、マレーシアとブルネイで新しい金融手法として注目が集まっているアッ=ラフヌと呼ばれるイスラーム型動産担保貸付手法を取り上げ、この手法の人々の資金調達行動への影響を分析する。そのことで、アッ=ラフヌの実態の全容を解明し、この手法のイスラーム経済論的意義を明らかにすることをめざした研究である。</p> <p>本論文は、5章から成り、序論と結論が付されている。</p> <p>第1章「イスラーム型マイクロファイナンス論の系譜とその特徴」では、イスラーム経済論における経済発展論の系譜とイスラーム金融の商業実践の沿革を踏まえて、両者を架橋する新たな実践形態として、イスラーム型マイクロクレジットに注目が集まっているという研究史的位置づけがなされている。</p> <p>第2章「現代マレー世界におけるイスラーム金融システムの発展とその特徴」では、マレーシアとブルネイのイスラーム金融の商業実践の沿革がまとめられ、両国に共通する特徴として、巡礼基金をその源流に持つ点、政府主導である点が挙げられ、課題として、生産部門への融資が消費部門のそれと比べて相対的に少ないことが挙げられている。</p> <p>第3章「イスラームにおける担保概念の金融手法化」では、近代以前のイスラーム法の担保概念に関する規定が、どのようにして現代のイスラーム金融における動産担保貸付手法に再構築され、実用化されていったのかについての分析が行われている。</p> <p>第4章「イスラーム型動産担保貸付の受容と経済活動への影響」では、アッ=ラフヌが実際に提供されているマレーシアとブルネイの金融機関における顧客への聞き取り調査にもとづき、彼らがアッ=ラフヌを利用する動機や用途に関する分析が行われている。そこでは、顧客は、家族・友人からの借り入れや銀行の個人ローンの代替手段としてアッ=ラフヌを利用しており、その用途は単なる消費のみならず、企業の事業資金にも広がっていることが明らかにされている。</p> <p>第5章「現代マレー世界の開発におけるイスラーム型動産担保貸付の役割」では、マレーシアとブルネイの開発政策の沿革を追いながら、近年重視されるようになっている中小企業振興において、アッ=ラフヌが重要な役割を担っていることが明らかにされている。</p>			

結論では、論文全体をまとめ、アッ=ラフヌが生産目的にも利用されている実態は、消費金融の手法と従来見なされていたイスラーム型動産担保貸付の位置づけの転換を促すものであり、これはイスラーム経済論自体の議論枠組みの変容にもつながるものであると総括されている。

(続紙2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、国際金融システムの一翼を担うまでに発展したイスラーム金融の新たな実践領域であるイスラーム型マイクロクレジットに着目し、その実態を綿密な現地調査によって解明し、その実践の意義をイスラーム経済論の視角から評価したものである。

近年のイスラーム経済論における主要な論点は3つある。第1は、イスラーム金融の実践の資本主義化に関する議論である。そこでは、近年のイスラーム金融は飛躍的に発展したものの、従来型金融との競争を重視し過ぎるあまり、その実践の内実は高度に資本主義化されてしまいイスラームの理念が置き去りにされているのではないか、理念重視の実践に回帰すべきではないかという議論が行われている。

第2は、イスラーム金融の理念と実態の乖離に関する議論である。そこでは、イスラーム経済論において、分配型手法に代表されるエクイティ型の金融手法を用いるのが最も理想的であると考えられてきたにもかかわらず、実際の現場では、固定利益分配型手法に代表されるデット型の金融手法が大半を占めており、この理念と実態の乖離をどう埋めるべきかという議論が行われている。

第3は、イスラーム金融の地域的多様性に関する議論である。そこでは、イスラーム金融の二大拠点である東南アジアと中東湾岸地域の実践を比較する際に、中東湾岸地域の実践の方がイスラームの理念をより重視し、他方、東南アジアでは、理念的望ましさを若干犠牲にしても従来型金融との競争力を重視した実践が大半を占めているという議論が優勢である。

本論文の価値は、こうした近年のイスラーム経済論で交わされている議論をしっかりと踏まえた上で、現代マレー世界におけるアッ=ラフヌ（イスラーム型動産担保貸付手法）という具体的事例の考察によって、イスラーム経済論の新たな方向性を指し示した点にある。

本論文の学術的な意義は、以下の3点にまとめることができる。

第1は、高度に資本主義化したイスラーム金融の新たな実践領域として注目が集まっているイスラーム型マイクロクレジットの実態について、従来、そのプレゼンスに比してほとんど取り上げられてこなかったアッ=ラフヌに着目し、その実態をマレーシアとブルネイにおける綿密な現地調査によって明らかにした点である。現地調査によって、アッ=ラフヌは、特に低所得層の資金調達先の多様化や容易化に貢献しており、両国におけるボトムアップ型の経済発展にとって不可欠な金融手法となっていることが明らかになった。本論文が解明したこのようなアッ=ラフヌの実態は、近年のイスラーム経済論におけるイスラームの理念への回帰論が実際に具現化していることを実証するものであり、理念回帰のかけ声が単にイデオロギー的志向性にとどまるのではなく、実質を伴ったオルタナティブな経済発展の道を開いていることを明確に示しているという点で

本論文の実証的貢献は非常に大きい。

第2は、デット型よりもエクイティ型の金融手法の方が望ましいという従来のイスラーム経済論における議論に対して、デット型金融手法の有用性を実証した点である。従来の議論においてデット型金融手法が批判されてきたのは、デット型手法の大半が消費金融の機能を果たすことが多く、イスラームが望ましいと考える実体経済の発展にそれほど寄与しないと考えられてきたからである。これに対して、本論文では、消費金融の手法と従来見なされていたアッ=ラフヌが、実際には中小企業の事業資金にも用いられることが示されている。これは、多くのイスラーム経済論者が支持している中小企業牽引型の経済発展のあり方を見事に具現しており、デット型金融手法の有用性を実証しているものだと言える。したがって、本論文の実証結果は「エクイティ型vs.デット型」というイスラーム経済論における従来の二項対立を超克するものであり、イスラーム経済論の新たな議論枠組みを構築したものだと評価できる。

第3は、イスラーム金融の地域的多様性の議論に対して、従来劣位に位置づけられてきた東南アジアの実践を再評価した点である。アッ=ラフヌは、東南アジア独自に開発され実用化されてきた金融手法である。本論文は、この東南アジア発のアッ=ラフヌの役割と意義を積極的に評価することによって、従来の中東牽引型のイスラーム金融の発展という構図を覆し、東南アジア牽引型の新しいイスラーム金融の発展経路が存在することを示した。これは、従来のイスラーム経済論のみならず、中東中心主義が根強く残っているイスラーム学やイスラーム地域研究の文脈においてもきわめて独創的な主張だと評価できる。

本論文は、以上のようにイスラーム経済論に大きな貢献をなすのみならず、イスラーム学やイスラーム地域研究にとっても貴重な貢献をなすものと考えられる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年1月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。